

新津きよみ

書下ろし

長篇サイコ・サスペンス

# 危険な恩人

き けん おんじん  
危険な恩人



KEIBUNSHA NOVELS

N-270

1997年11月10日 第1刷

著 者 新津きよみ

発行者 加納将光

発行所 株式会社 勁文社

〒164東京都中野区本町3-32-15

(振替 00190-8-13311)

(3372) 5021 (編集)

電話・東京 (3372) 3291 (営業)

印刷 凸版印刷株式会社

製本 明興製本工業株式会社

一定価はカバーに表示してあります—

著者と了解のうえ検印を廃します。(落丁本・乱丁本はおとりかえします。)

# 新津きよみ

書下ろし

長篇サイ

オカルペン

ス

危険な悪人

学院図書章

ISBN4-7669-2831-8

C0293 ¥781E

定価：本体781円＋税

# KEIBUNSHA NOVELS

線路に落ちた愛娘を身の危険もかえりみず助けてくれた、名前も分からない命の恩人。新聞投書がきっかけで、身元が分かり、再会した男の、危険な魅力。売れないタレントだというその男は巧みに堂本良子の家庭に入り込み、娘の心を掴む。良子もまたその男の、夫にはない男らしさに惹かれ始めていた。それが、崩壊の序曲とも知らずに。やがてふたりの周辺に刑事の姿が…。揺れ動く女心をリアルに描く傑作サイコ・サスペンス。



き けん おんじん  
危険な恩人



KEIBUNSHA NOVELS

N-270

1997年11月10日 第1刷

著 者 新津きよみ

発行者 加納将光

発行所 株式会社 勁文社

〒164東京都中野区本町3-32-15

(振替 00190-8-13311)

(3372) 5021 (編集)

電話・東京 (3372) 3291 (営業)

印刷 凸版印刷株式会社

製本 明興製本工業株式会社

一定価はカバーに表示してあります—

著者と了解のうえ検印を廃します。(落丁本・乱丁本はおとりかえします。)



新津きよみ

# 陰な恩人

書下ろし長篇  
サイコ・サスペンス



# 危険な恩人



## プロローグ

「ママ、どうして絵を描くの？」

右手の先にいつものぬくもりを感じながら、堂本良子は、ふいに思い出したその質問の答えを探していた。

「どうして山を描くの？」であれば、「そこに山があるからよ」と、「どうして花を描くの？」であれば、「そこに花があるからよ」と、答えられたであろう。だが、良子は、この春に五歳になったばかりの娘のその質問に、とっさには答えられなかった。

——どうしてかしらね。何かを表現したい、という気持ちだが、じっとしていても、心の底からこみあげてきてしまうせいか。表現って何かって？ うーん、むずかしいな。どう言えばいいのかしら。こ

うしたい、ああしたい、と思う気持ち。すごくきれいなものや、おもしろいものを見たとき、紙に書いて残しておきたいと思うでしょ？ それは、感動って言うの。……えっ？ 写真を撮ればいいじゃないかって？ うーん、それとはちょっと違うの。描くってことはね、きれいだなあ、美しいなあ、おもしろいなあ、と思ったものを、自分の心の中で一度自分だけのものにして、それを平らな紙の上に再現するってことなの。えっ？ 再現するがわからない？ そうよね、うーん……ママもよくわかんないな。でも、鉛筆を持って、クレヨンを持って、筆を持って描きたい。描きたいから描く。自分の気持ちに素直に描く。ママにとっては何、朝起きて、歯磨きするのや、服に着替えたり、ご飯を食べたりするのと同じように、すごく自然なことなの。

五歳の子に、「絵を描く」ことの意味をどう説明したらいいのか、良子は頭の中で一生懸命語彙を選び、文章にした。家に帰ったら、夕食の席でじっく

り話して聞かせようと思った。

十月三日。芸術の秋の晴れた日の午後。美大時代の友達が開いた個展の帰りだった。

J R 中野駅の中央線のホーム。鳩が数羽、頭上で喉を鳴らしている。ラッシュ時ほどではないが、予想外の混みようだ。

線路の向こうの低い壁には、美大受験のための専門学校の案内板がはめこまれている。良子は、友達と自分の昔といまを重ね合わせて、そのポスターを眺めた。

学生時代と変わらぬ名前で絵画展を開いた友達と、学生時代とは違う名前で自宅で絵画教室を開いている自分。「画家」と呼ばれている彼女と、「絵画教室の先生」と呼ばれている自分とを比較し、寂しさと羨望と焦りを抱いた。

——わたしだって、あのときもう一つ別の道を選んでいたら、いまごろは「画家」と呼ばれるようになっていたかもしれないのに。

気づいたときには、いつものぬくもりは右手から消えていた。

「<sup>みき</sup>美希」

良子は、娘の名を呼んだ。控えめに。

つないでいたはずの娘の手が離れている。周囲を見まわした。娘の姿はない。急に視野がかすんだようになり、動悸が早まった。

「美希！」

今度は、思いきり叫んだ。「美希！ 美希！」

右手前方で、少女の泣き声が上がった。

良子は、ハッとした。まさか、と思い、心臓が止まりそうになった。ホームの先には、当然だが線路がある。線路上は、当然だが電車が通過する。

「ママ！」と、少女の声が呼んだ。悲痛な響きを持ったその声は、紛れもなく良子の娘——美希のものだった。

良子は、頭から氷のたっぷり入った冷水と、ドロドロとしたタールとを一緒に浴びせかけられたよう

に、皮膚が凍りつき、粘つく感覚に襲われた。自分を取り巻く現実の世界が、一気に光を失った。

「子供が落ちたぞ」

大人の声が言った。男の声なのか女の声なのか、良子にはわからなかった。

右手前方に人だかりができている。

良子のまぶたの裏で、油彩用の赤い絵の具が飛び散った。スカーレットと呼ばれる緋色とマダーと呼ばれる茜色あかねの中間のような色だった。が、けっしてローズ、つまり薔薇色ではなかった。それは、ロールシャッハの心理テストの図柄のような形になった。現実の世界が色を失っただけに、脳裏に現れた色はひどく鮮やかだった。

——美希が落ちた。美希が線路に落ちた。電車がくる。電車が線路にやってくる。

良子の脳裏で、何かの記号のように、乾いた自分の声がこだまする。

——大変、大変、早く、早く、助け上げなくちゃ、

美希が大変、大変。早く、早く。

脳からせつ々するような指令が出ている。だが、良子の身体は動かない。指一本も動かない。まるで、二本の足がホームに張りついてしまったかのように。「電車がくる」

誰かが言った。ざわめきが、どよめきが生じた。

良子は、反射的に左を見た。電光標示板に「電車が入ってまいります」と点ともっている。すべての臓腑が飛び跳ねた。電車が前の駅を出たということだ。

今度は、まぶたの裏いっぱい、山吹色——イエローが飛散した。今日、美希にさせて来たワンピースの色だ。緋色と茜色と山吹色が入り交じった。それは、けっしてその色の組み合わせではなるはずのない、血の色を作った。

美希の泣き声が大きくなる。誰かが、蒼白な顔で立ったままの良子に気づいたのだらう。「お母さん？」と怖いものでも見るような目で聞いてきた。それが、合図になったかのように、ようやく良子の

足は動いた。

「美希！」

良子は、黄色い線を越えてホームの端に駆け寄った。美希は線路上で、顔だけこちらに振り向け、あちら向きに転んでいた。けさ幼稚園に行く前に、良子の手際よく編んだ三つ編みの一方が、背中に垂れている。

「美希」

良子は膝をつき、右手を差しのべた。娘を引き揚げようと思ったのだ。だが、綿を詰めた人形のように細かい美希の白い手は、悲しいほど遠くにあった。そして、まるでビルの六階から見下ろしているほどの高さがあるように見えた。恐怖で身体がすぐんだ状態であるのだろう。美希の中で動いている部分は、口だけだ。「ママ、ママ」と呼んでいる。

バランスを崩した。誰かの手が良子の左腕をつかんだ。きっとそちらを向いた。初老の男性だった。良子の中に、煮えたぎるような怒りと焦燥感が生じ

た。

——母親のわたしが助けようとしてるのよ。なぜ止めるのよ。

何秒後かに起きる事態は明白だ。

電車が滑り込んできて、体重が十六キロに満たない幼い身体を轢断する。轟音、悲鳴、鮮血、切断される肉体。飛散する肉片。服の切れ端。そしてまた悲鳴。夥しい悲鳴……。それらを想像しただけで、胸が張り裂け、臓腑が引きちぎれる思いがした。

「誰か助けて。美希を助けて」

反応はない。周囲の空気は張りつめているくせに、恐ろしく緩慢で鈍感な色をたたえている。膝から下の力が抜けた。絶望、恐怖、後悔……。良子は、言葉にならない悲鳴を上げた。

そのとき、左のほうに風が起きた。良子の目の前を黒い影がよぎった。一瞬、それは、大きな黒いこもりのように映った。

黒ずくめの男が線路に降り立った。美希の両脇に

両手を差し入れ、軽々と抱き上げると、荷物でも放り投げるようにホームへと差し上げた。すばらしく機敏な動作だった。美希は、顔をくしゃくしゃにしていた。複数の手がそちらに伸びた。

美希は、ホームに転がされた。良子は、きゃしゃな娘の身体を抱え込んだ。長い時間離れていたわけではないのに、そのぬくもりを懐かしいと思った。

「早く！ 電車がきちゃう」

近くにいた女性が、男に向かって叫んだ。泣き声に近かった。

良子は、美希の頭を抱きかかえたまま、顔を上げた。オレンジ色の電車が、左方面から突き進んでくる。ぐんぐんその姿が大きくなる。

男は、ちらと近づいてくる電車のほうを見た。そして、何を思ったか数歩後ずさり、一瞬、かがみこんで何かを拾い上げたあと、すばやくジャケットのポケットに押し込んだ。深呼吸。そのしぐさは、走り高跳びのときの助走を思わせた。男はホームの縁

に手をかけ、弾みをつけると、腕の力だけで軽やかに蹴上がった。男は、腕で自分の胴体を引き上げ、線路と平行にホームに腹ばいになった。警笛が耳をつんざいた。電車がホームに滑り込んでくる直前に、男はわずかにホームからはみ出ていた足の先を引っ込めた。

砂埃を含んだ突風が巻き起こった。良子の前髪とサイドの髪が風にあおられ、額や頬を叩いた。視野が遮られた。

安堵のため息。拍手。

「ああ、よかったね」

「助かった」

「危なかったな」

「すごいね、あの人」

「子供って、何するかわかんないよな」

「ホント、危ないよね」

はじめて、良子の耳に性別と老若が明確になった声が届いた。

電車が停止する。ドアが開く。降りる人たちがいる。ぺたりと座り込んで動かない母と子を、ブロンズ製の母子像でも見るような奇異なまなざしで見に行く。母子に熱い視線を残しながら、へ幼女転落事故の現場に居合わせた何人かが、開いたドアに吸い込まれて行く。

良子は、ホームの中ほどで座ったままでいた。美希の泣き声はおさまっていた。恐怖が甘えに変わりつつあった。

「ボールが落ちちゃったんだもん」

美希は、泣きべそをかきながら、消え入りそうな声で言った。

「拾おうとしたの？」

美希は、こくりとうなずいた。おでこも手も汗ばんでいる。

良子は、自分が見ていなかった瞬間を理解した。ころがったボールを追って行ったら、ホームの隅から足を滑らせて転落してしまった、と言いたいのだ。

ろう。

「足が痛いよ」

五歳の子の恐怖は、自分をすっかりつかまえていてくれなかった母親を責めることへと向かったようだ。わたしに恐怖を味わせたのはママだよ、というふうに黒目がちの目を見開き、口を尖らせて訴えた。右の膝小僧と、両手のひらを少しすりむいている。足首は赤くなっていないから、どうやらねんぎはしていないようだ。

黄色いゴムボールは、良子の個展を開いた友達、水野かおりが美希にプレゼントしてくれたものだった。

個展会場になったデパートの一角のギャラリーの入口付近に、水野かおり自身の手で作ったオブジェが飾られていた。伊万里焼の大皿に盛られた色とりどりのゴムボールは、そうしたオブジェの一つだった。水野かおりは、興味を示した美希の目の高さまでかがみこんで、「何色が好き？」と聞いた。美希

はちょっと考えてから、自分の服の色に合わせたかのように「黄色」と言った。「ピンク」と答えるかと思った良子には、その答えが意外に思われた。水野かおりは、黄色いボールを一つ取り上げて、美希に「はい、どうぞ」と手渡した。

美大時代の友達で現在は「画家」の水野かおりがくれたそのボールが、災厄を招いた。良子は、改めて恐ろしさに身震いした。ほんの少し前の状況を思い出しただけで、気が遠のいていく。

関心が助けられた娘に注がれすぎていたのに気づいて、良子が顔を上げたのと、それが差し出されたのとは同時だった。

娘を助けてくれた男が、黄色いボールを手のひらに載せて、「どうぞ」と良子に言った。良子は立ち上がり、男に頭を下げた。何か言わねばならない、と頭ではわかっていたが、興奮が冷めない状態では、滑らかな礼の言葉も出てこない。

二人は、短い時間、見つめ合った。男はかすかに

微笑し、乱れた髪をかき上げた。そして、視線を母親から娘に動かした。

「ボールが轢かれなくてよかったね」かがみこんで、美希に言う。

美希は、はにかんだ顔でボールを受け取った。小さな声で「ありがとう」と言い、恥じらいの顔のまま母親を見上げ、そろそろと立ち上がる。その動作を見て、良子は弾かれたように「あ、ありがとうございしました」と言った。あれほどの恐怖を味わったくせに、すんなりと平常心を取り戻したように見える娘に戸惑った。三十五歳の自分より五歳の娘のほうに、ずっと落ち着いていると思った。五歳の娘に先に礼を言われたことが、気の動転につながった。良子は、こういう場面で言うべき言葉を忘れてしまった。

「本当に、本当にありがとうございます。本当に……ありがとうございます」

ばかみたいに、その言葉を繰り返した。